



TITLE:

今村一正・今村知商・今村仁兵衛
(数学史の研究)

AUTHOR(S):

島野, 達雄; 下浦, 康邦; 田村, 三郎; 端山, 文忠

CITATION:

島野, 達雄 ...[et al]. 今村一正・今村知商・今村仁兵衛 (数学史の研究).
数理解析研究所講究録 2001, 1195: 105-115

ISSUE DATE:

2001-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/64837>

RIGHT:

今村一正・今村知商・今村仁兵衛

近畿和算ゼミナール 島野達雄・下浦康邦・田村三郎・端山文忠
Kinki Wasan Seminar Tatsuo Shimano, Yasukuni Shimoura,
Saburo Tamura, Fumitada Hayama

A 今村一正について

一正は元の名を衣笠六左衛門といい、天正2年(1574)頃、播磨国三木に生まれた。父六郎左衛門は三木城主別所長治に仕えていたが、三木城攻撃の際(天正8年)に戦死した。時に一正はわずか7歳であった。17歳の時、松阪城主古田重勝の家臣となり、秀吉の朝鮮出兵の時には重勝に従って従軍して、功をたてた。重勝の死後、弟重治が後を継ぎ、浜田に転封された。その際、一正は築城の監督を任せられ、元和8年(1622)に完成した。その功により、古田侯の出所(三河国今村)の地名をとって、今村一正の名を賜わると同時に、重勝が秀吉から拝領していた陣羽織を与えられた。慶安1年(1648)、二代続いた古田氏に替って松平周防守が入城した。当時、一正は隠居の身で、77歳であったという。(とすると1572年生まれか?)古田家断絶後、今村家は讃岐国高松藩に仕えた。

以上が資料(1)などを基に、今村一正の経歴を述べたものであるが、築城の監督を任せられたこと以外、数学との結びつきは見られない。(築城の監督についても、「浜田御城地目録」、「石州濱田御城覚書」などの中に今村一正の名はない。(島野))

(1) 衣笠南翁墓碑(東京都台東区谷中の玉林寺)

衣笠南翁(1680—1746)は今村一正の孫で、この墓碑は翁の没後、弟子たちが建立したものである。碑文は漢文体で書かれており、久本方氏が苦勞して読まれた文面が文献(6)に出ているので、その前半部分を再録する。

先生諱一淳号南翁姓源衣笠氏士自赤穂族其播州人也高祖父曰衣笠六左衛門其豊臣公攻三木城也其主別所小三郎長治衣笠興列求同族使之俱守而城□力戦而死之其子年僅七歳為淡路□氏求父長漸居士人之松平十七裕諸山太神宮□折□身至勢□途遇松坂侯兵部少輔重勝君出侯一見守之□帰□臣□□祖父六左衛門一正是也後□征□□之□早侯□□□□王□□人□真□□関弓而□三一三□以身□侯躍藩□前□人目□衣□持□□□己侯進□□人侯□其忠□賜禄三百石細川□丹□□諸侯贈書一正褒忠有君□命今村父重勝君卒其□重恒尚?督父大膳□重攻君攝其没事方移封石州龜山城也大膳君使一正監築城事賜外套一領曰之豊臣公□□□今村送汝汝着□能監其事其□待如砦

このうち?のところはシに勾の字である。読めぬ所もしくは誤読の一部は、次の文献(2)でおおよそ読み取れる。(2)は明治の初期に読まれたため、百年後久本氏が読まれた時よりはるかに読みやすかったのであろう。

(2) 「大日本人名辞書」(経済雑誌社(明治 19 年初版)明治 33 年第 4 版)「イマムラ カズマサ」の項

文献(1)を基にした今村一正の紹介が出ているので、それを再録する。

今村一正は播磨の人なり、平六左衛門と称す初め衣笠氏を冒し後ち命ありて今の姓に改たむ父六郎左衛門と曰ふ別所長治に仕へ豊臣秀吉と戦て死す一正時に年纔かに七歳長ずるに及びて漸く士人の孤なることを知り年十七にして山田の太神宮に詣り竊に身を祈らんと欲し伊勢に到る途に松坂侯古田重勝の出るに遇ふ侯一見して之を奇として携へて高麗の役に従はしむ一日侯早晨に単騎にして軍営を巡察す高麗の人其の単騎を伺ひ弓を番て之に擬す一正疾に身を以て侯を蔽ひ馬前に踊躍す高麗人目視定まらず満を持して猶予す已にして侯進みて高麗人を斬り一正の忠烈を賞して禄三百石を賜ふ細川加藤福島丹羽等亦書を贈りて其忠を褒む重勝卒す其の嗣重恒尚ほ幼なり叔父重政其の政事を攝し石州亀山城に移る重政一正をして築城の事を監せしめ外套一領を賜ひて曰く是れ豊臣公我に賜ふ所なり今汝に贈る汝是を着て能く其の事を監せよと其の優待せらるることは是くの如し(衣笠南翁墓碣)

この文章を見ると、衣笠南翁墓碑(1)からの丸写しと思える部分がある。たとえば(2)をもとに、(1)の後半部分を次のように読むことも出来よう。(ただし、墓碑を直接見ていないのであるから、何とも言えないが。)

重勝君卒其嗣重恒尚幼督父大膳亮重政君攝其政事方移封石州亀山城也大膳君使一正監築城事賜外套一領曰之豊臣公賜我也今是送汝汝着是能監其事其優待如是

しかし、文献(1)(2)とも、数学との関連は出てこない。この辞書中、今村一正と今村仁兵衛とは別項目として出ている。

(3) 「濱田町史」(編纂委員大島幾太郎、一誠社、昭和 10 年)

この中で初めて、重治侯が算数家今村一正らに、築城候補地を検分させたとある。さらに(2)の内容を紹介しながら余分に内容を追記している。すなわち「一正殊に数学を好み且其の道に通達した。朝鮮軍中明人捕虜の中に算数家が居たので日夜研究に没頭し、帰朝の後も研究と普及に力を尽し、和算の歴史に出て居る程の人物だ」とある。何が根拠なのか解らない。しかし、一正と知商との混同はまだない。以降この大島氏の文章が一人歩きするようになる。

(4) 「石見国邑智郡八戸川附近・桜井地方史話」(謄写版、大島幾太郎著。昭和 30 年序)

この中にも、他の文献にはない新説が沢山でている。毛利重能は本名を森脇勘兵衛といい、島根県邑智郡桜井地方長谷(桜江町長谷か?)に生まれた。大阪落城後、京都に道場を開いた。弟子の中に、今村仁兵衛知商、吉田光由、今村一正、高原庄左衛門らがいたとある。この根拠も全く解らない。

(5) 「浜田市誌上巻」(浜田市発行、昭和 48 年)

文献(3)を基にしたと思えるが、算数家今村一正と二箇所にでている。

(6) 「久本ファミリーの記録」(私家版、久本方著)

文献(1)(2)(3)に依拠しながら、初めて今村一正を今村知商とを同一人物としている。
共同調査をされた桑原秀夫氏は早急に結論は出せないとされているが…

- (7) 「ふるさとを築いたひとびとー浜田藩追懐の碑 人物伝ー」(浜田市教育委員会・平成4年)

文献(1)(2)(3)に依拠している。築城の計算実務を担当したのが、今村一正であったと述べられており、さらに「一正は、朝鮮出陣中に数学を学び、帰国後も努力を続け数学者としても名を成し、日本数学史上重要な人物として注目される程の実力を有していたようであるが、残念ながらその業績や没年などは不明である」とある。

- (8) 「和算にまつわる思い出」(雑誌「Pen 友」(No.19,1998) 掲載)、久本方執筆)

桑原秀夫氏の疑問にも拘わらず、今村一正と今村知商の同一人説を述べてある。

B 今村知商

幼少より算術を志し、多くの本を読んだが、充分には理解出来なかったのが、京都の毛利重能について学んだ。河州狛庄の人・今村知商は寛永16年(1639)に「豎亥録」を100部だけ江戸で出版し、翌年(1640)には、「因帰算歌」を出版した。また、寛永19年(1642)には「日月会合算法」を著している。さらに、万治3年(1660)には、弟子の安藤有益の「豎亥録仮名抄」の跋文を書いている。この頃、公務で多忙であった。

まず、河州狛庄についての考察からはじめよう。

- (9) 「大阪府全志」(大阪府全志発行所、大正11年)

この文献(9)によれば、候補地として次の三ヵ所が考えられるが、一番有力なのはウ)であろう。(故宮本良雄氏の調査による。)

ア) 河内国大県郡巨麻郷(柏原市)

「和名抄」にみえる大県郡(豎上村・豎下村)の六郷の一つに巨麻郷がある。大狛神社は式内社の一つで、大狛連(高麗系種族)と深い関係があり、信貴・生駒山地内に位置し、現在の柏原市東部の本堂附近に比定されている。

イ) 河内国若江郡巨麻郷(東大阪市)

「和名抄」にみえる若江郡の七郷の一つに巨麻郷がある。若江北町と若江南町との間の一部を巨摩橋通と言い、寝屋川に架かる橋を巨摩橋という。またこの附近に巨摩廢寺跡がある。

ウ) 河内国渋川郡巨摩荘(八尾市)

「和名抄」にみえる渋川郡の五郷の後に許麻荘の名がある。また式内社の一つである許摩神社は八尾市久宝寺にあるし、近くに許麻橋地蔵もある。昔の渋川郡久宝寺村はもともと巨摩荘とも呼ばれていた。巨摩ないし巨麻は狛または高麗であって、駒または許摩にも作ることがある。この許摩神社の近くに麟角堂跡があるが、この麟角堂は領主渋川満貞が戦国の末頃開設した学校で、後安井定次が天正3年(1575)に再興し、堺の碩学今村道和を招聘したことが記録されている。

イ) とウ) の地域は隣接しているので両地域を含む広い範囲が巨麻郷または巨摩荘

と呼ばれていたのかもしれない。

今村道和と今村知商との関係は解らないが、この事から解るように渋川の地域は学問的雰囲気のあるところで、学者今村知商が誕生するのに相応しい所である。

(10) 今村知商「豎亥録」(寛永 16 年(1639)刊)

自序によると、幼少より算術を志し、多くの本を読んだが、充分には理解できなかったため、花洛の毛利重能に教えを乞い、四則と勾股弦までの方弦の術を学んだが、円弦の術は学べなかった。或師に問うたところ、万物の本は一であるから、一の根元を知らなくてはならないと言われた。以降自ら研鑽して円弦の術(径矢弦・弧矢弦の術)を得た。よって、方円平直の式九条を述べるのがこの書の目的だとしている。

跋文には、100 部だけを、江戸で上梓すると書いてある。

(11) 今村知商「因帰算歌」(寛永 17 年(1640)刊)

自序によると、幼い頃から算術の道を志し、多くの本を懐にして、千里の道も遠からず師を求めたと述べている。

(12) 今村知商算註「日月会合算法」(寛永 19(1642)稿)

表題の下に、「此冊者書経卷之一閏月之算術本于集註釈之也」とある。

島野の調査によると、「書経卷之一」は蔡沈「書集伝」の「書経卷之一・虞書・堯典」であって、蔡沈の註釈の部分が「日月会合算法」の本文と一致する。「書集伝」を含む「書経大全」から、「林氏曰」の林氏は従来言われていたような林羅山ではなくて、宋の林之奇(1112—1176)であることが判明した。さらに、林羅山も寛永 3 年(1626)に蔡沈「書集伝」の訓点を完了しているが、内容を理解せず機械的に訓点を施したものに過ぎない。(島野)

このように、蔡沈「書集伝」は日本の儒者たちに読まれていた。しかしながら、今村知商はこれまで言われて来たような林羅山と関係はなかったと思われる。なぜなら、羅山が誤読して訓点を施した後、少なくともその部分は正しく読まれた知商の「日月会合算法」が書かれているし、その後十年以上経って羅山の訓点本が誤読を含んだまま刊行されているからである。

(13) 安藤有益「豎亥録仮名抄」(寛文 2 年(1662)刊)

最初に著者不明の「豎亥録序」がある。これによると、洛陽の人毛利重能の弟子である今村知商は、蕩子の家に生れたため、あまり文章の勉強をしなかったので、自分の著した数学書に題名をつけて欲しいと依頼してきた。そこで「山海経」の中から豎亥の名をとって豎亥録としたと出ている。

それにしても、この序文は 23 年も前の寛永 16 年(1639)の閏仲冬(陰暦閏 11 月)に書かれている。「豎亥録」の跋文にも寛永 16 年 11 月と出ている。この序文がもともと「豎亥録」の中から消えたのは何故だろうか。

今村知商が儒家今村道和の身内であったとすると、自らを蕩子の家に生れたとは言わないのではなかろうか。逆に自らをへりくだって言ったのだろうか。

安藤有益の自序によると、万治3年秋にはじめて「豎亥録」を見たのである。そして、この「仮名抄」を著したのが同じ年の12月6日である。いかにも早過ぎるが…

今村知商の跋文によると、「豎亥録」は自分の若い頃書いたものだから、今開いて見ると不充分なところが多い。身任致仕労公事曾無私日とあるのは、後半は公の仕事で忙しくて見なおす時間がないということである。（この頃、今村仁兵衛は確かに平藩の郡奉行として忙しくしていた。）しかし、前半の致仕とは停年（70歳）で仕事をやめることで、70歳をも意味する言葉である。すると、この身任致仕は「仕事を止めるべき70歳の身ではあるが」（島野の読みによると「仕官をまっとうすべき身であり）」というような意味であろうか？（もし、数えて70歳なら、知商は1591年生れということになる。）

続けて、安藤有益が縁あってわが門を訪ね、たまたまこの本を見つけ、補緝してそれを見せてくれた。これを検閲してみると良くできている。弟子のほうが師よりも勝れているといえよう、とも書いている。

C 今村仁兵衛

今村仁兵衛は寛永年間中、幕府の勘定頭（勘定奉行）曾根源左衛門吉次の紹介で、平藩内藤忠興に仕えたとされており、正保年間(1544—1547)、仁兵衛は忠興に平藩の国絵図制作を命じられた。さらに、慶安2年(1649)には郡奉行になった。家老たちから藩体制を整備するための法規「壁紙」が二種類仁兵衛宛に渡される。仁兵衛はこの「壁紙」の線にそって農業改革を実施した。その一つが、半石半永制（田畑とも米にて半納、金にて半納）から、田方米納・畑方金納制に変えたことである。これは今村仁兵衛の力によるものであった。また、慶安4年(1651)には磐城平から江戸への廻米の便をはかるため、運送路の調査および舟通路の開鑿を担当した。さらに、寛文1年(1661)、寺社奉行を仰せ付かっている。そして、寛文8年(1668)に亡くなった。

(14)「内藤家文書」（明治大学所蔵）

これは重要な資料であるが、直接利用できなかったもので、次の2次資料を利用した。そのため、多くの間違いがあるのではないかと恐れる。

(15)「内藤侯平藩史料」（平市教育委員会、昭和37年）

(16)「譜代藩の研究—譜代内藤藩の藩政と藩領—」（明治大学内藤家文書研究会編、昭和47年）特に所収の神崎彰利著「磐城平藩確立期の政策」

神崎氏によると、内藤家文書のうち、万治以降のものは良質であるが、それより前の分限帳は後年の編纂になるもので、その信憑性は低いという。また、享保年間を上限とする家臣の「由緒書」は後年の写しが多く、信ずるに足るものが極めてすくない、と述べられている。

これらの文献には今村仁兵衛の名はあるが、後年の「由緒書」以外には、今村知商や今村仁兵衛知商の名は出てこない。しかし、内藤忠興公時代後半の分限帳には、既に今村仁兵衛の名はないが、今村姓として、庄左衛門（大坂城天守修覆奉行勤仕）、

八郎右衛門（在大坂、二百五十石）、長左衛門（仁兵衛とともに寺社支配）、庄右衛門（三百石）らの名が見える。さらに内藤義泰公の今村姓家臣として、長右衛門（二百石）、六郎右衛門（四百石）、八郎左衛門（百石）、新平（二百石）、庄右衛門（二百石）、仁兵衛（二百石）、孫左衛門（百五十石）、長左衛門（二百俵）などが分限帳に見える。その他の資料(28)などには、義泰の家臣で仁兵衛の子である市郎兵衛の名があるし、元禄十五年には検地役人であった清左衛門の名がある。しかし、内藤忠興以前には今村姓の家臣は分限帳(神崎氏が信憑性が低いと言われているもの)などには見あたらない。これらの人達すべてが仁兵衛と血族であったとは言えないだろうが、すくなくとも今村仁兵衛一族は大坂と関係が深く、仁兵衛以降（延岡に移って以降も）代々一族の者が内藤家に仕えていたことが読み取れる。

内藤義泰の家臣である今村仁兵衛（二百石）は二代目または三代目であろう。

(17) 藁谷広之助著「我等の郷土」（藁谷広之助発行、昭和 31 年）

「義人今村仁兵衛」の項には、昔から仁兵衛について伝えられてきた説話が述べられている。

(18) 今村仁兵衛の供養塔

これは昭和 54 年いわき市小名浜住吉に建立されたものである。

(19) 野口泰助・加藤芳信・川瀬正臣「今村仁兵衛知商について」（『和算かながわ』第 17 号増刊号）,1999

この論文(19)は用心深く注意はされているが、最終的には仁兵衛と知商とは同一人物と見ておられる。その点は後で検討するとして、(17)(18)に述べられている仁兵衛にまつわる説話を孫引きの形ではあるが、文献(19)をもとに紹介しておこう。

供養塔には「住吉は低地で少しの雨にも水害凶作に見まわれ村民は苦しんだ。時の奉行今村仁兵衛はこの有様を見て縄延べにより村民を助けて下さいました。このことが城主に知れ、霜月六日三本松の所で処刑されたことが今に伝えられています。このような恩人を十九夜講中として供養塔を建立し永く後世に伝えるものであります」とある。仁兵衛が亡くなったのは寛文 8 年 11 月 6 日(1668.12.9)である。文献(17)によると、仁兵衛の享年は 42 歳（または 50 歳）であった。（この享年の信憑性については(19)でも疑われている通りである。）

このように説話では刑死となっているが、文献(14)の「由緒書」には病死とある。

「由緒書」での病死説は曾孫によるものであるから、血族のものは刑死など不名誉なことは書かないであろうし、神崎氏も指摘されているように、「由緒書」の内容は全面的には信頼がおけない。他方、文献(19)でも述べているように、キリシタンなど特別の理由がない限り、寺社奉行がそんなに簡単に磔の刑になるのかという疑問が残る。中村正弘氏らも(29)の中でこの点を問題にされ、藩士のねたみによるリンチの可能性を指摘しておられる。さらに、重職にあった者が処刑された場合、類が血族に及ぶのが常ではなかろうか。（キリシタンもしくはリンチによって

処刑された場合は尚更のことではあるまいか。) 前に見たように寺社奉行となった仁兵衛の多くの血族が内藤藩士となっているし、しかも同名の二代目? 今村仁兵衛が内藤義泰の家臣となっている。分限帳には見あたらなかったが、(28)に出ているように仁兵衛の子である市郎兵衛も内藤藩士であった。このように考えると、刑死説は仁兵衛を義人として美化するためのものではなかろうか。

D 今村仁兵衛知商

仁兵衛知商と一緒に書かれている文献はすべて 18 世紀に入ってからのもので、やや信頼性に欠ける。文献は古いほうから取り上げておく。

(20) 「荒木彦四郎村英先生茶談」(1710 前後)

この中に今村仁兵衛知商とある。この仁兵衛が内藤忠興家臣の仁兵衛であるとは限らない。

(21) 「由緒書」(享保 17 年(1732)筆写)

文献(14)の中に含まれているものであるが、重要なものであるので、(19)からの孫引きの形ではあるが、全文を再録しておく。(西田知己氏が「日本数学史学会研究発表会」で配布した資料も利用した。)

長山様御代

曾祖父 今村仁兵衛知商

寛永年中公儀御勘定頭曾根源左衛門様を以御領内御仕候置取納御勝手方共ニ御被仰付度趣ニ而御家ニ罷出申候由ニ御座候御宛介之儀御極茂無御座御役筋入用次第ニ被下置候趣承知仕候正保年中御国絵図仕立候以後勤方之儀地方役取可有御座与奉存候寛文之頃神谷赤沼村屋舗ニ罷有申候同八年ニ病死仕候迄相勤申候
長山様とは、内藤忠興の戒名である。また、曾根源左衛門とは曾根吉次のことである。重要なことは、この由緒書に「曾祖父 今村仁兵衛知商」とあることであろう。享保 17 年(1732)の筆写であるにしても、今村知商が平藩士の今村仁兵衛であることを示す最も古い資料であると思われる。しかしながら、この資料の内容に関してはその信憑性を神崎氏が疑われている通りである。さらに、身内の証言であるがために、著名な数学者今村知商と曾祖父今村仁兵衛とを同一視したくなったのかもしれない。さらに、不名誉な刑死などを避けて病死とした可能性もある。

(22) 村井中漸著「算学系統」(明和 8 年(1771))

今村知商・東武人・仁兵衛とある。この仁兵衛が内藤忠興家臣の仁兵衛であるとは限らない。

(23) 「大日本人名辞書」(経済雑誌社(初版明治 19 年))「イマムラ ニヘエ」の項

「今村仁兵衛は算術家なり。毛利重能の門人なり。水戸光圀に仕うと言う。名は知高(商)通称又勘左衛門と言う。豎亥録を著す。平賀保寿(秀)安藤友(有)益隅田江雲等の高弟あり」と出ている。(人名にやたら誤記が多い。)光圀に仕えたという説には疑問があるし、この仁兵衛が寺社奉行となった仁兵衛と同じとは

限らない。

勘左衛門については、あまり信頼がおけない文献(4)であるが、その中に「今村知商は師匠（毛利勘兵衛重能）より勘左衛門を許され」たとある。

- (24) 遠藤利貞著「大日本数学史」(明治 29 年(1896)) (三上らによる増修 1960 年)

今村知商、仁兵衛と称す、とあり、「同門吉田光由とは、年齢及ばざること多きも、その学力に至りては、多く譲らず」と書かれているが、増修での三上の註ではその根拠は不明だとしてある。この仁兵衛が内藤忠興家臣の仁兵衛と同じとは限らない。

- (25) 林鶴一著「和算研究集録」(昭和 12 年(1937))

文献(24)と同様。「今村知商。仁兵衛と称す。…吉田光由より年少なり」とある。吉田光由より年少とする根拠も不明であるし、この仁兵衛が内藤忠興家臣の仁兵衛と同一人物とは限らない。

- (26) 「藩史大辞典」(雄山閣出版)

この中で、内藤忠興家臣の今村仁兵衛と数学者今村知商を同一視している。

- (27) 西田知己著「江戸の算術指南」(研成社、1999)

文献(14)(21)を基にしながら、無条件に内藤忠興家臣今村仁兵衛と数学者今村知商を同一人としている。

- (28) 佐藤賢一 (27)の書評 (「科学史研究」No213)

この中に、「元禄世間咄風聞集」に出ている今村仁兵衛にまつわる保井算知の話が紹介されている。孫引きになるが、(28)の文章を引用しておく。

「内藤左京亮様御家来今村市郎兵衛、病中に庭に火もへ申候。是市郎兵衛親仁兵衛高野ひじりを殺し申候由。その因果と後にさた有之由。市郎兵衛は松下族之助婿にて有之候由。市郎兵衛病中に族之助夜伽仕候節、庭に火もへ申候をたしかに見申候由。市郎兵衛女房もほどなく相果申候由。」

内藤左京亮は内藤義泰のことである。ところで、松下族之助とその婿今村市郎兵衛の名は義泰公の分限帳には見あたらなかった。しかし、松賀族之助（二千石）なら内藤義泰公の家老？の中に見られる。松賀族之助は寛文 10 年(1670)に平藩に召抱えられているので、忠興公家臣の今村仁兵衛の死後、平藩に来たわけである。松下族之助と松賀族之助とが同一人物だとしたら、族之助と仁兵衛とは同世代と考えられるので、あるいはこの仁兵衛は、寺社奉行となった仁兵衛とは違って、義泰公の家臣である二代目？仁兵衛かもしれない。

E 今村一正・今村知商・今村仁兵衛

今村一正は 1574 年頃播州に生れ、1622 年から 1648 年頃まで、浜田の古田侯に仕えていたので、1639 年河州狛庄の人・今村知商と同一視はできない。

次に数学者今村知商と平藩士今村仁兵衛とが同一人物として話を進めてみよう。まず活躍地の考察から始める。今村知商の河州狛庄はほぼ八尾市久宝寺と考えられ

る。他方、「堅亥録」を江戸で出版したこと、村井中漸が知商を東武人と書いていること、および弟子の安藤有益が会津藩士で、平賀保秀が水戸藩士であることなどから、今村知商と関東との結びつきは十分に考えられる。一方、今村仁兵衛以降、大坂と関係の深い今村姓の者が多数平藩士になっていることは、もともと大坂出身？の今村知商と平藩を結びつける根拠ともなるであろう。今村仁兵衛が平藩に召抱えられて以降のことであるが、藩主内藤忠興が大坂城代となっている。以上のことから、大坂出身？の今村知商と平藩の今村仁兵衛とを結び付けることは出来るであろう。

次に、生没年から眺めて見る。仁兵衛が寛文8年(1668)、42歳か50歳で亡くなったという説話を信じれば、1627年か1619年の生れということになる。すると、数えて13歳または21歳の時に、「堅亥録」を著したことになるが、前のほうは消えるので、一応1619年に生れ、21歳で「堅亥録」を著し、31歳で郡奉行となった。「仮名抄」の跋文を書いた42歳当時も、郡奉行として多忙な毎日であった。その翌年43歳で寺社奉行となり、50歳で亡くなったという説が成立する。(この場合、21歳の若さで「堅亥録」を著したという点に無理があるし、信憑性に欠ける伝承に依拠しすぎているので、この説は取り下げるのがよいと思われる。) 他方、「仮名抄」の跋文での身任致仕の意味が「70歳の身ではあるが」ということなら、1591年に生まれ、49歳で「堅亥録」を著し、59歳で郡奉行となり、「仮名抄」に跋文を書いた70歳当時も郡奉行として多忙であった。翌年71歳で寺社奉行となり、78歳で亡くなったと言う説も成立する。この場合、伝承としての説話は採用しないことになるし、吉田光由よりも年少であるといわれていることとも矛盾する。しかしながら、ここの二説は成立しないとは言いきれないであろう。特にこれら二説は「仮名抄」に跋文を書いた当時、多忙であったことを具体的に裏づけている。

それでは数学者今村知商と内藤忠興公家臣今村仁兵衛とは別人だとして議論を進めてみよう。大坂出身？の知商と、内藤藩の家臣で大坂とも関係の深い今村一族とは血族関係ではないかという推測を留保する。次に、生没年から眺めてみよう。

「仮名抄」での跋文の身任致仕を70歳説の根拠とすれば、今村知商は1591年に生れ、1639年49歳の時「堅亥録」を著し、1660年70歳の時「堅亥録仮名抄」の跋文を書いている。ただし、没年は解らない。この説の場合、吉田光由より年少であったという話には反するし、70歳当時どのような公務についていたのかが不明である点が大きな欠点であろう。

他方、今村仁兵衛の享年は説話によると、42歳か50歳となっているが、寛永年間に内藤忠興に仕えたという「由緒書」を信じれば、享年42歳説は消える。従って、今村仁兵衛は1619年に生れ、25歳頃内藤家に仕え、31歳で郡奉行、43歳で寺社奉行となっている。そして、1668年50歳で亡くなった。(ここで、寛永年間に平藩に仕えたという「由緒書」の内容を無視すれば、1627年に生れ、23歳で郡奉行、35

歳で寺社奉行、42歳で死亡という説も成り立つが、やや無理があろう。) いずれにしても、これらの説は信憑性に欠ける説話に依拠しているため、仁兵衛の年齢に関してはすべて根拠薄弱といわざるをえない。

二人はともに大坂と関係深いと考えられることから、二人は血族関係にあるとも考えられよう。下浦が中村正弘氏からもらったプレプリント(29)には、二人は親子だと考えれば話が合うという指摘がある。

(29) 中村正弘・鈴木武雄「知商と仁兵衛」

今村知商の通称が仁兵衛であったとしても、何の矛盾もない。なぜなら、知商が初代仁兵衛、内藤忠興に仕えた仁兵衛は二代目と考えればよいし、義泰公に仕えた仁兵衛は三代目ということになるだけのことである。

しかしながら、数学者今村知商と寺社奉行今村仁兵衛とが別人と考えるのであれば、知商と平藩を結びつける確たるものが何一つないことに気づくであろう。証拠となるものとしては、「由緒書」の中にある「曾祖父 今村仁兵衛知商」という記事だけである。ところが、この書の内容の信憑性が疑われる以上、何をか言わんやである。

さらに、荒木村英(20)や村井中漸(22)らにおける仁兵衛が平藩の仁兵衛であるとは限らないのである。その上、知商と仁兵衛とが血族関係にあるかのような状況証拠も露の如くに消え去ってしまうであろう。

まとめとして

今村一正と今村知商とを結びつけるのは無理である。

数学者今村知商と寺社奉行今村仁兵衛を同一人だとして見よう。この場合、今村仁兵衛知商は1619年に生れ、21歳で「堅亥録」を著し、31歳で郡奉行、42歳で「堅亥録仮名抄」の跋文を書き、43歳で寺社奉行、50歳で死亡したという説(この説は信憑性に欠ける説話に依拠しすぎている)と

1591年に生れ、49歳で「堅亥録」を著し、59歳で郡奉行、70歳で「堅亥録仮名抄」の跋文を書き、71歳で寺社奉行、78歳で死亡という説も成立する。

この場合、後者の方が有力であろう。

次に、数学者今村知商と寺社奉行今村仁兵衛を別人だとしてみよう。この場合、数学者今村知商は1591年に生れ、49歳で「堅亥録」を著し、70歳で「堅亥録仮名抄」の跋文を書いた。(この頃の知商の公務が何なのか不明なのが、この説の弱点である。) 没年は解らない。それに対し

寺社奉行今村仁兵衛は1619年に生れ、25歳頃平藩に奉職し、31歳で郡奉行、43歳で寺社奉行となり、50歳で亡くなった。または、

1627年に生れ、23歳で郡奉行、35歳で寺社奉行となり、42歳で亡くなったという説も成立するが、やや弱い。

以上の二説はともに信憑性に欠ける説話に依拠しているため、仁兵衛の年齢に関してはすべて根拠がない。すると残るのは、慶安 2 年(1649)平藩郡奉行、寛文 1 年(1661)寺社奉行となり、寛文 8 年(1668)年に亡くなった、という年齢を抜きにした年代のみである。

二人を結びつける状況証拠は、すべて根拠薄弱なものばかりであるから、二人は全く血族関係もない別人と考えることの方が妥当のようにも思える。しかしながら、今村知商が初代仁兵衛で、寺社奉行今村仁兵衛が二代目で初代の子、さらに、内藤義泰に仕えた仁兵衛は三代目と考えることもできよう。この親子説はさしたる証拠はないわりにすっきりしているので捨てがたい。

以上、どの説が有力であるかは、にわかには決めがたいところである。

追記

共同執筆者の下浦康邦氏は、8 月 21 日の数理解析研究所での発表直後の 9 月 1 日突然逝去された。慎んで哀悼の意を捧げる。